

場 (ba) のエネルギーを記憶させる位相共鳴加工

位相共鳴加工

位相共鳴加工は、0ポイント共鳴反応とも呼び独自に開発した位相共鳴反応装置を使用します。これには、形態幾何学の集約から導き出した PRC と呼ぶ位相共鳴回路が組み込んであり、装置の内部は PRC から発生する 0point 共鳴場 (ba) で満たされている。

※0ポイント共鳴反応：resonance reaction 0point

※位相共鳴反応装置：phase resonance reaction device

※位相共鳴回路：phase resonance circuit

※空間の揺らぎ：fluctuation field

※0ポイント共鳴場：0point resonance field



位相共鳴加工は、反応させる対象物 (モノ) を装置に入れ、ある一定の時間 0ポイント共鳴場 (ba) と共振させる方法で行います。0ポイント共鳴場 (ba) との共振は、対象物 (モノ) を装置に入れた直後からはじまり、0ポイント共鳴場 (ba) と共振する状態がある一定時間続くと対象物 (モノ) は 0ポイント共鳴場 (ba) を記憶します。

これに要する時間は、位相共鳴加工する対象物 (モノ) により異なります。

水や水分を含む液体は比較的短い時間で反応処理が完了するのに対して、樹脂や鉱物・金属などの無機物はより長い時間を要します。

この違いは、数千回に及ぶ試験とそれから発生する現象力の確認を幾度となく繰り返すことで導き出されました。対象物（モノ）により反応処理に要する時間が異なるのは、原子核と電子の間に発生しているエネルギー場（ba）が、原子に因り異なり、その違いが 0 ポイント共鳴場（ba）を記憶する時間の差となっているのではないかと推測しています。

本装置は、水などの液体に適したタイプと繊維やプラスチックなどに適したタイプをはじめ、鉱物や金属などに適したタイプがあり、物質により異なるエネルギー場（ba）と 0 ポイント共鳴場（ba）が最も共鳴し易い環境を PRC 回路のセッティングにより作り出しています。

ゼロポイント共鳴場

調和点維持のエネルギー

調和点の「調和」とは、釣り合いがとれて全体が一つにまとまること。

調和点の「点」は、調和した状態の中心を意味します。

私たちは「朝、目が覚め、お腹が減り、トイレに行き、仕事や家事を行い、睡眠をとる」当たり前のように繰り返される「生（sei）の営み」も、絶妙なバランスで生命が成り立っているからこそ繰り返され、少しでもそのバランスが乱れると、当たり前のことが当たり前ではなくなる事態が発生します。

また、私たちは、それぞれが暮らす国や地域の気候や風土に自らを適応させ順応することで生（sei）を営んでいるが、気温や気圧、湿度が大きく変動すると体調を崩す人が多くなる様に、環境は生（sei）の営みに大きく影響しています。

「地球」。そこに住む生命は、それぞれに適した環境の下で生（sei）を営んでいますが、当たり前の様にそこにある「水や空気・光・温度」は、自然環境が奇跡とも呼べる絶妙なバランスである一定の範囲が保たれているからこそ、生命を誕生させ、それぞれが生（sei）を謳歌することができます。

人間の生命も、様々な要素がうまく釣り合うことで全体が一つにまとまり、生（sei）を営むことができている。それは地球を一つの生命体として捉えるなら人間をはじめとする生命と相似であり、様々な要素がうまく釣り合っているからこそ生命を抱く自然環境のバランスが保たれ、全体（地球）として一つにまとまっているのです。

調和点とは、様々な要素の釣り合いがとれ、全体が一つにまとまっているときの中心を意味するのですが、それは中心としてのポジションに留まらず、原点や中点、基点としてのポジションを併せ持つことから 0point（ゼロポイント）と呼ぶことですべてのポジションがカバーされます。

すべての生命は、それを成り立たせる様々な要素がうまく釣り合うことで生（sei）が維持され、その営みが繰り返されている。それは、地球も同じで、地球を成り立たせている様々な要素がうまく釣り合っているからこそ、我々生命が生かされ、同時に地球自身も生かされているのです。

さらにそれは、地球という惑星のみに与えられたポジションではなく、活動するすべての惑星・無限の星たちも相似であり、それぞれを成り立たせている要素がうまく釣り合っているからこそ星たちは輝き続け、如いては宇宙という全体が成り立っているのです。

これらを踏まえた上で言えば、調和点維持のエネルギーとは、すべての中心であると同時に全体の系が成り立つための原点となることから、それに相応しい名称として 0point（ゼロポイント）と呼ぶことに至りました。

見える世界と見えざる世界、それはゼロポイントを基点に反転する世界

見える世界と見えざる世界

見える世界と見えざる世界。その捉え方は、人それぞれでポジションにより様々な捉え方があります。科学（物理）は、自然界に生じる様々な現象の因を物質に求め、それを探求することで現象世界の生成消滅を明かしてきました。このポジションは、果のすべてには必ず因があり、その因を突き止め誰が行っても再現できる法則を確立することで因果律（物理法則）を積み重ねてきました。

その一方、科学が生まれる遥か以前から存在していた信仰や宗教、祈りは、太陽をはじめとする自然界の背景に、偉大なる力が存在し、人種や国・地域を問わず多くの人々がそれを主あるいは神として崇め崇拝していました。それは、自然や宇宙を成り立たせ操っている「大いなる存在」として崇める一方、恐れられる存在であるが、近代科学の成立した頃を境に、科学はそれを人間にまつわる「心の世界・祈りの対象」として探求する対象から除外し、宗教の世界に委ねるようになりました。

虚実の midpoint

見える世界と見えざる世界。二つの世界が存在することを否定する人は多くはないでしょう。科学（物理）のポジションに準えれば、見える世界は「物質世界」いわゆるモノの世界。一方の見えざる世界は「非物質世界」で、科学的なポジションからいうとそれは「存在しな

い・有り得ない」ことになる。しかし、物質・モノとして存在しなくとも、存在する事実がある。それは私たちの「心」であり「精神」だ。心や精神は物質ではなく、「思うなどの働きや、考えたり想像する世界」だ。

その存在は、科学を絶対視する者であっても「否定することはない」なぜなら、その人も人間である以上、心の働きや精神によって「自分が成り立っていることを知っている」からだ。

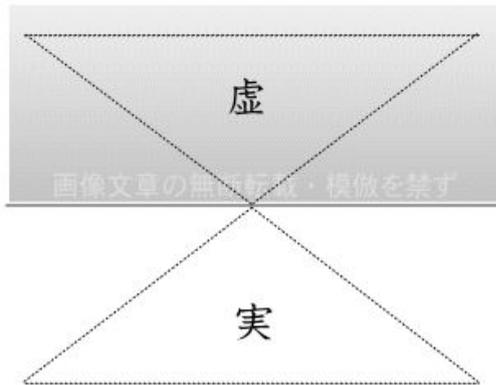
科学が、心や精神いわゆる非物質の領域をその対象から除外した理由は二つある。一つは、物質として存在しないゆえに「測定する術（すべ）がない」「測定できない」のと、その世界を「人間にまつわる祈りの世界・信仰や宗教の世界」としてわけた方が「都合が良かった」のだ。

前者は、なるほどと受け入れることができるだろうが、後者は、信仰や宗教の歴史と古典科学が近代科学に移行する時代に起こった歴史（権力＝お金）を偏った見方をせず知るものなら、容易に理解できるでしょう。しかし、一般の人々に「それ」を理解できる様に述べるには困難を要するので、ここでは割愛させていただきます。縁があり興味がある人だけにお話させていただくことをご了承ください。

さて、見える世界と見えざる世界、科学（物理）のポジションでは、物質と非物質。信仰や宗教・祈りなど人間にまつわるポジションでは、見えざる世界は、「心（思い）や精神世界（俗にスピリチュアル）」あるいは「霊（rei）」や「念」などの言葉で表される領域をいいます。見える世界と見えざる世界を、そのどちらにも通用する言葉に置き換えると、見える世界を「実（jitu）」見えざる世界は「虚（kyo）」になり、この両者は対極（たいきょく）となり、これらの関係を図で表すと下記の様になります。

虚実の中心0 (零)

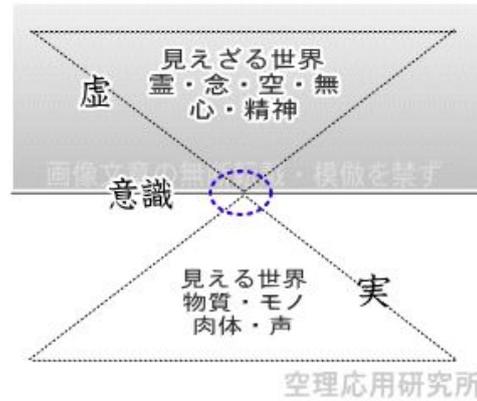
No-01



見える世界を 実 (jitu)
見えざる世界を 虚 (kyo) と換言すると
その両者は意識を界面として二つの領域
にわけることができます。

虚実の中心0 (零)

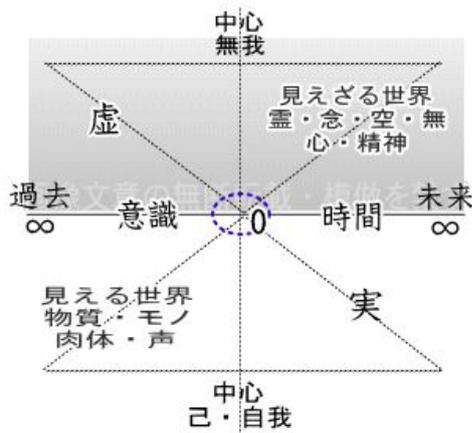
No-02



画像は、実と虚の領域に属するそれぞれの要素を示します。「声」が実の領域に属するのは、声（音）は肉体を有する者だけに限られ、その派生となる言語（文字）も実領域の要素になるからだ。

虚実の中心0 (零)

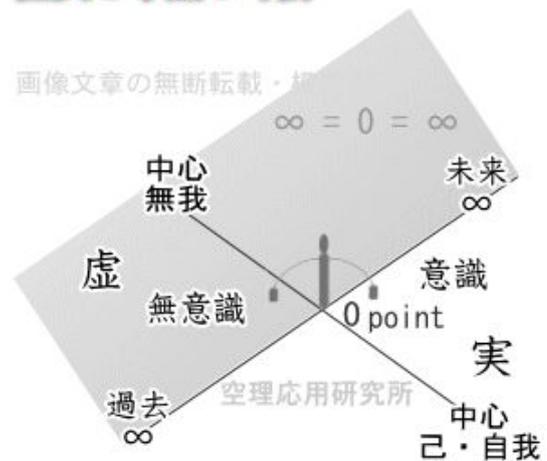
No-03



実と虚の要素とそれを分ける時間（意識）はその中心0pointを原点に成立し0pointを基点に折り返すと、虚は実が反転した形で重畳することとなる。

虚実の中心0 (零)

No-04

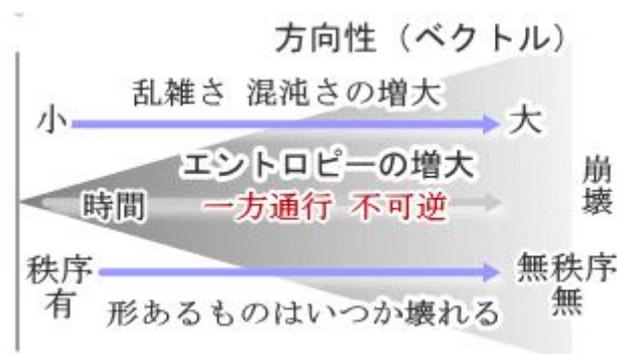


つまり私たちが思推する見えざる世界は重畳した実と虚の領域を二次元的に捉えていることになる。このからくりがわからない故に見えざる世界に対する観念世界が乱立しエントロピーが減少する世界に辿り着けないのだ。

エントロピー 秩序から無秩序への流れ

生あるものは必ず滅し、形あるものは必ず壊れる。仏教でいう諸行無常の世界観を述べたこのフレーズは、物理学でいうエントロピーの法則と同じ向性を持ちます。エントロピーや因果律（原因と結果）の法則は、秩序あるものは必ず無秩序に向かう流れ。生命だけに見られる負のエントロピーは、0pointの視点から見ることで、その秘密が溶けて行きます。あらゆる物質が持つ方向性（ベクトル）の意味を画像を用いてお話します。

秩序・無秩序・エントロピー No-01



「生あるものはいつか死を迎え、形あるものはいつか壊れる」あらゆる物質は秩序から無秩序に向かう流れにあり、その向きを方向性(ベクトル)という。方向性(ベクトル)は「生→死」「秩序→無秩序」「有→無」の矢印が示す向性を持ち、一方通行で不可逆である。

秩序・無秩序・エントロピー No-02

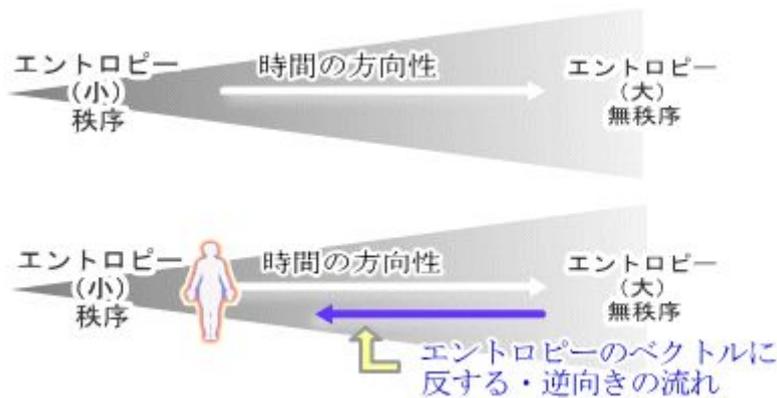
物理学で言うエントロピーは、どんな物質もそのままにしておくと無秩序な状態に向かい、周囲と区別がつかなくなることをいう。



例えば、熱々のコーヒーも、そのままにしておくとかやがて器と同じ温度になり、室温と同じになる。モノの世界で当たり前の様に起こるこの現象は、秩序から無秩序に向かう流れ・エントロピーを反映するもので、あらゆる物質はこの流れから逃れることは出来ない。

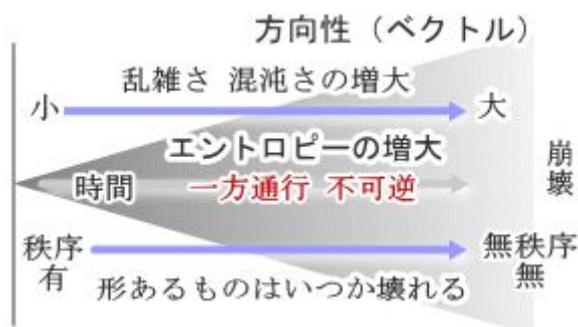
秩序・無秩序・エントロピー No-03

ところが地球上の生命が活動しているときエントロピーの増大(無秩序に進む向性) に反する・逆向きの振る舞いをみせます。それは、傷が自然と治ったり、体温が一定に保たれるなどの現象で、それはエントロピーの法則とは逆向きのベクトル(画像 青の矢印)が発生していることを物語っている。



秩序・無秩序・エントロピー No-04

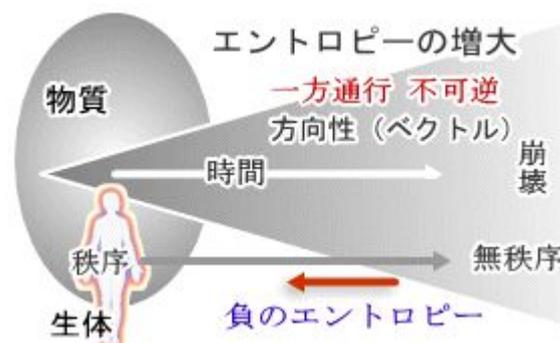
熱力学の第二法則とも呼ばれるエントロピーは物理の根幹を成す原理原則。これは全ての物質を支配する不変的な法則であることは間違いありません。



しかし、生命現象に見られる「エントロピー増大の法則に反する現象」を合理的に解き明かす術を物理科学は持ち得ず、それゆえそれが何に因るのか？の答えを見出せないまま足踏みしている現実が横たわります。

秩序・無秩序・エントロピー No-05

エントロピーの法則に反する生命現象の秘密についてノーベル物理学賞を受賞した物理学者エルヴィン・シュレディンガー (1887~1961)は「生物は負のエントロピーを食べている」と提唱しました。



シュレディンガーは、エントロピーの流れ (向性)に逆行する生命現象は「負のエントロピー」であると述べています。

秩序・無秩序・エントロピー No-06

負のエントロピーの提唱により生物科学はさらなる進化を遂げていますが「負のエントロピーは何か？」という本質に迫る答えを見出せない状況で足踏みをしています。

これは「どういうことか？」

生命の秘密が「負のエントロピー」に因ることは頭でわかっても、それが何でできているかわからないと本当の理解(利用し活用する)には至りません。

そこに至れないのは何故か？

その根本的な理由は、エントロピー自体が物質ではないからです。

秩序・無秩序・エントロピー No-07

そもそもエントロピーは「物質に因る現象」ではありません。もし、それが物質であるなら、それを構成する要素(成分)を分析すれば解き明かせるでしょう。

(物理) 科学は、物質を対象とする学問体系故に、負のエントロピーに相当する力や働きを物質に求め、日々新たな成分の開発に勤しんでいます。

しかし、そのスタンスは常に「物質」を対象とするもの故に、いつまでも「負のエントロピー-それ自身」に辿り着くことはないだろう。なぜなら、物質自身が方向性(ベクトル)を持っているからだ。

秩序・無秩序・エントロピー No-08

エントロピーの法則と同じ様に、重力(万有引力の法則)も周知の事実として認知されています。「重力」の存在は誰もが認める普遍的な法則(力)ですがエントロピーと同じ様に在来科学はそれが「何で出来ているか?」今だ明確な答えを出せない状況にあります。

それは重力やエントロピーに限らず時間にも同じことが言えるでしょう。

「有るが無い」矛盾するこの中に潜む光の母体 Opoint に焦点を定め、共鳴というアプローチによりその現象化にチャレンジしているのが位相共鳴です。

秩序・無秩序・エントロピー No-09

エントロピーの法則に準えるなら宇宙の全体や物質の基本的な運動は、大局的にはエントロピー増大に向かっており、どんな物質もそのままに放置しておくとならざる無秩序な状態に向かい、周囲の環境と区別がつかなくなっていく。

これは物質世界に限定された事象ではなく、我々が意識する世界にも当てはまります。

科学の世界が、理論物理学・量子論へと進むにつれ、言語と数式が一人歩きし現象世界(リアリティ)と乖離する一方、言葉とイメージが一人歩きし現実と乖離する宗教や精神世界は、対極においてこの両者は相似を呈しているといっても過言ではないだろう。

秩序・無秩序・エントロピー No-10

地球全体に深刻な影響を及ぼすことが明らかでありながら、その真実が隠蔽されている例の事故は、経済や社会の混沌さを反映する事象であり、世界各地で続発する天変地異は、先ほどの科学と宗教が現実世界と乖離する点で相似現象を呈していることと無縁ではないだろう。

Opoint の理解には、現証も重要であるが、それと同等以上に重要な点が現象である。

現証と現象が等価(=)になるとき Opoint は その力を行使する。真実は光と闇の中心に沈み込んでいる。